

C—10 民俗衣装に関する研究(第4報)
—旧秋月藩黒田家の火事羽織—

福岡教育大 ○後藤 信子
近畿大女短大 久保田初枝

1. 第3報につづいて旧秋月藩黒田家の遺品として保存されている火事羽織について調査し、衣服の機能性等について考察した。

2. 旧秋月藩黒田家は江戸詰めの際に桜田組や大手組として火消しを命ぜられたので、藩公は自から火事装束を身にまとい、出馬して指揮されたという。その際、歴代藩主が好んで用いたと伝えられる「猩々緋の羅紗に白銀の御紋付の火事羽織」が保存されているので、その形態、構成および素材、縫製について述べる。

3. 表布は 133 cm の W 巾の緋色羅紗で、背縫、袖つけに縫目がない。裏布は小花唐草模様金色金らんの 70 cm の広巾物を用い、背縫はなく、袖つけだけ縫われている。衿は巾広く 14 cm に仕立てられている。袖は下が薙刀形の丸みで袖つけ側より袖口側が 10 cm 広く仕立てられている。これは手さばきをよくするためと、火の粉が袂に入らない安全性から工夫されたものと考えられる。また馬乗りが 51 cm あいているのは乗馬および帯刀による当然必要な機能性と考えられる。なお直径 20 cm の白銀の家紋を背に飾っているのは表布の緋色、裏布の金らんとよく調和し、それに家紋が焰に光って秋月領主ここにありと一目にして衆知させる目的も果たされたものと考えられる。

他にマント形に刺しゅうで飾った火事装束もあるが、その報告は次回にゆずる。